

# 成人版瘦身プレッシャー尺度の開発と 信頼性・妥当性の検討

小野 佑希 神戸学院大学人間文化科学研究科 村山 恭朗 神戸学院大学心理学部

Developing Pressure of Thinness Scale and testing its reliability and validity for adults

Yuki Ono (*Graduate School of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University*)  
and Yasuo Murayama (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

我が国において、やせの遷延化は深刻な問題となっている。過剰なやせ状態のリスク因子として、様々な変数が指摘されており、瘦身プレッシャーはその一つである。近年、他者から受ける瘦身プレッシャーに関する尺度（大学生用瘦身プレッシャー尺度, Pressure for Thinness Scales for College Student; PTS）が開発されたが、PTS は大学生用であり、大学生期以降の成人に安易に適用することは困難である。そこで本研究は、他者から受ける瘦身プレッシャーを測定する自己評定式尺度の成人版（瘦身プレッシャー尺度, Pressure of Thinness Scale; PTS）を開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。質問紙調査を行い、女性 1500 名（ $35.21 \pm 7.70$  歳）を対象に分析を行った。因子分析の結果、3 因子 11 項目が抽出された。PTS は高い信頼性を示し、食行動異常、メディアから受ける瘦身プレッシャー、体型不満に関する 3 つの外的基準との間に中程度の相関関係を示した。これらの結果から、PTS は高い信頼性と妥当性を兼ね備える尺度であると考えられる。

キーワード：食行動異常・瘦身プレッシャー・体型不満

Kobe Gakuin University Journal of Psychology  
2018, Vol.1, No.1, pp.11-16

## 問題と目的

我が国において、やせの遷延化は深刻な問題となっている。国民健康・栄養調査（厚生労働省, 2016）では、20 代の女性の 20%以上が過剰なやせ状態（ $BMI < 18.5 \text{ kg/m}^2$ ）にあることが報告されている。過剰なやせの問題は若年層だけにとどまらず、より幅広い年代での問題となっている。例えば、国外調査では、就労者（20 ~ 35 歳）の 32%以上が過度なやせ状態であること（Lähteenmäki, Saarni, Suokas, Saarni, Perälä, Lönnqvist & Suvisaari, 2014）や 40 代以上の女性の 15%以上が過度なやせ状態にあること（Micali et al., 2017）が見出されている。過剰なやせ状態は、メンタルヘルスの悪化（伊藤他, 2016）や疲労感（重田・笹田・鈴木・檜村, 2007）と関連するとともに、摂食障害の発症リスクを高めること（浦上・小島・沢宮・坂野, 2009）から、過剰なやせ状態を予防することは、心身の健康の保持増進を図るうえで重要である。

過剰なやせ状態のリスク因子として、様々な変数が指摘されており（山蔦, 2012; 浦上・小島・沢宮, 2015）、瘦身プレッシャーはその一つである。瘦身プレッシャーとは、「やせたい」もしくは「やせなくてはならない」と感じるプレッシャーを指す（丸井・村山, 2017）。瘦身プレッシャーには、メディアから受ける瘦身プレッシャーと他者から受ける瘦身プレッシャーの 2 つがある（Schaefer, Harriger, Heinberg, Soderberg & Thompson, 2017）が、近年までメディアから受ける瘦身プレッシャーについての研究が盛んになされてきた（浦上他, 2015）。メディアから受ける瘦身プレッシャーでは、特にテレビと雑誌から受ける影響が大きいとされ（浦上他, 2015）、メディアから受ける瘦身プレッシャーの程度が強いほど、食行動異常に悪影響を及ぼすことが報告されている（小澤・富家・宮野・小山・川上・坂野, 2005）。また、別の研究（浦上他, 2015）では、ダイエットなど、食事を過度にコントロールする学生ほど、強くメディアから瘦身プレッシャーを受けることも認められて

いる。一方、メディアから受ける痩身プレッシャーに比べ、他者から受ける痩身プレッシャーに関する国内の知見は少ない状況にある。この背景の一端には、欧米とは異なり (Schaefer et al., 2017)、国内において、他者から受ける痩身プレッシャーを評定する自己評価式尺度の作成が行われていなかったことがある。しかし、大学生を対象とした先行研究では、女性モデルよりも同性同輩の外見と比較をする方が、食行動異常が増悪することが見出されている (守安・諸井・前原・松谷・小切間, 2011)。また、国外調査では、重要な他者がダイエットを行うほど、不適切なダイエットを行うリスクが高まること、重要な他者からダイエット行動に対する励ましを受ける学生ほど、食行動異常が増悪することが報告されている (Eisenberg, Berge & Sztainer, 2013)。以上の知見から、他者から受ける痩身プレッシャーも過剰な痩せ状態の重要なリスク因子であると考えられる。それを受けて、近年、国内でも他者から受ける痩身プレッシャーに関する自己評価式尺度 (以下、PTS) が開発され、信頼性ととともに、痩身願望尺度 (馬場・菅原, 2000) などの外的基準を用いた基準関連妥当性が確認されている (丸井・村山, 2017)。

しかし、丸井・村山 (2017) が開発した PTS 尺度は大学生版であり、大学生以降の成人に安易に適用することは困難である。大学生以降の成人期や中年期においても過度なやせ状態の遷延化が指摘されていること (Lähteenmäki et al., 2014; Micali et al., 2017) から、成人に適用可能である他者から受ける痩身プレッシャーの自己評価式尺度を開発することは重要である。そこで本研究は、他者から受ける痩身プレッシャーを測定する自己評定式尺度の成人版 (痩身プレッシャー尺度, Pressure of Thinness Scale; PTS) を開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。なお、本研究の対象年齢は、大学生版が適用できない 23 歳から 40 代を対象 (大学生・大学院生は除外) とした。海外の研究では、50 代以降の摂食障害の有病率は他の年代と比べると著しく低下すること (Hudson, Hiripi, Pope & Kessler, 2007) や、男性と比較して、女性の摂食障害の有病率がこの 10 年間で有意に増加していること (厚生労働省, 2016) から、本研究では、大学生を除く 23 歳から 40 代の女性を対象とすることにする。

これまでの研究において、他者から受ける痩身プレッシャーはメディアから受ける痩身プレッシャーや食行動異常と関連することが報告されていること (丸井・村山, 2017; Schaefer et al., 2017) から、PTS の妥当性を検証する外的基準として、メディアから受ける痩身プレッシャーを測定する日本版 Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-3 短縮版 (山宮・島井, 2012; SATAQ-3JS)、食行動異常を測定する食行動異常傾向測定尺度 (山蔦・中井・野村, 2009; AEBS) を用いる。さ

らに、体型不満が高い女性は他者から受ける痩身願望が高いことが推測されることから、体型不満を測定する日本語版 Eating Disorder Inventory-91 (志村・堀江・熊野・久保木・末松・坂野, 1994) も外的基準に加える。

## 方 法

### 調査対象者

本調査はリサーチ会社に委託し 2018 年 9 月に実施された。調査対象者は 20 代 (23 歳～29 歳)、30 代 (30 歳～39 歳)、40 代 (40 歳～49 歳) の学生ではない成人女性 1500 名 (各年齢段階 500 名) を対象とした (35.21 ± 7.70 歳)。なお、本研究の手続きは、A 大学「人を対象とする医学系研究等倫理審査委員会」の審査と承認を受けた (承認番号: HEB17-03)。

### 調査材料

**他者から受ける痩身プレッシャー<sup>1</sup>** 周囲の他者から受ける痩身プレッシャーの程度を評定するため、丸井・村山 (2017) によって開発された大学生用痩身プレッシャー尺度 (Pressure for Thinness Scale for College Student, 以下、PTS) を使用した。当該尺度は、1 因子 13 項目で構成される自己記入式の尺度であり、回答形式は 4 件法 (1: 全くあてはまらない—4: 非常にあてはまる) である。先行研究 (丸井・村山, 2017) において、高い内的整合性 ( $\alpha = .75$ ) とともに、食行動異常、痩身願望、痩身理想の内在化などを外的基準とした基準関連妥当性が確認されている (丸井・村山, 2017)。本研究における内的整合性は .94 であった。なお、大学生版の質問のはじめには、『身近な他者 (友人 / 家族 / 恋人) から以下のような項目について言われた時、痩せなければならないというプレッシャー (焦り) をどのくらい感じますか。あてはまる数字に一つ○をつけてください。』という教示文を提示しているが、成人版である本尺度は、教示文を以下のように変更した (『身近な他者 (友人 / 家族 / 同僚 / 上司 / 部下 / 恋人など) から以下のような項目について言われた時、痩せなければならないというプレッシャー (焦り) をどのくらい感じますか。あてはまる数字に一つ○をつけてください。』)。

**メディアから受ける痩身プレッシャー** メディアから受ける痩身プレッシャーの程度を評定するために、山宮・島井 (2012) によって作成された日本版 Sociocultural Attitudes Towards Appearance Questionnaire-3 短縮版 (以下、SATAQ-3JS) を使用した。当該尺度は 3 因子 12 項目で構成される自己記入式尺度であり、回

1 この尺度は、先行研究 (丸井・村山, 2017) において、項目を選定する際に半構造化面接を行っているため、本研究において項目の内容的な検討は行わなかった。

答形式は5件法（1：まったく同意しない—5：かなり同意する）である。本研究では、下位尺度であるプレッシャー尺度の3項目（「テレビや雑誌を見ているとやせなければというプレッシャーを感じる」など）を使用した。食行動異常、身体比較などの外的基準との相関により、妥当性が確認されている。なお、本研究における内的整合性は.97であった。

**食行動異常** 食行動異常の程度を評定するために、山蔦・中井・野村（2009）の食行動異常傾向測定尺度（Abnormal Eating Behavior Scale; 以下、AEBS）を使用した。当該尺度は3因子19項目で構成される自己記入式尺度であり、回答形式6件法（1：まったくない—6：いつも）である。また、食行動異常、やせ願望などによる基準関連妥当性が確認されている。

なお、本研究における内的整合性は.91であった。

**体型不満** 体型の不満足感を評定するため、志村・堀江・熊野・久保木・久松・坂野（1994）によって作成された日本語版 Eating Disorder Inventory-91（以下、EDI）を使用した。当該尺度は6因子68項目で構成される自己記入式尺度であり、回答形式は6件法（0：全然ない—5：いつも）である。本研究では、下位尺度であるボディイメージ尺度の11項目を使用した。食行動異常との外的基準との相関により、妥当性が確認されている（志村他, 1995）。なお、本研究における内的整合性は.91であった。

## 結 果

### PTSの因子構造

大学生版PTSの各項目に対して、先行研究（丸井・村山, 2017）で報告されている因子構造に基づいて因子分析を行ったところ、十分な適合度が得られなかった（GFI=.666, AGFI=.532, CFI=.768, RMSEA=.190）。そこで、主因子法（プロマックス回転）による探索的因子分析を行った。

分析の結果、因子数の決定はスクリープロット、固有値の落差を考慮し、3因子を抽出した。項目内で負荷量が.40に満たなかった項目（項目11：他者から、自分の体型に関するポジティブなこと（やせた、細くなったなど）を言われるとプレッシャーを感じる）と、複数の因子（第1因子と第2因子）にわたって.35以上の負荷量を示した項目（項目8：他者と自分の体型を比べてプレッシャーを感じる）を除外した。

上記の2項目を除外したうえで、再度因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、3因子11項目が抽出された（Table 1：これらの結果を踏まえ、以後、PTSは11項目3因子構造とした）。第1因子は「他者が、ダイエットしていることを知るとプレッシャーを感じる」や「他者が痩せたと聞くとプレッシャーを感じる」ど、他者と自分を比較することで瘦身プレッシャーを感じる内容の項目（4項目）で構成されることから、『他者との比較から生じるプレッシャー』と解釈された。第2因子は「他

Table 1  
PTS各項目の因子負荷量

項 目	I	II	III
<b>I 他者との比較から生じるプレッシャー</b>			
6. 他者が、ダイエットをしていることを知るとプレッシャーを感じる	<b>.904</b>	-.058	.044
4. 他者が、痩せたと聞くとプレッシャーを感じる	<b>.897</b>	-.042	.003
5. 他者が、痩せたと聞くと自分の体型が気になる	<b>.879</b>	.079	-.067
7. 他者が、ダイエットをしていることを知ると自分もしなければと感じる	<b>.783</b>	.038	.051
<b>II 他者からの身体の指摘から生じるプレッシャー</b>			
1. 他者から、身体的な部分に関すると言われるとプレッシャーを感じる	-.054	<b>.870</b>	-.012
3. 他者から、足の太さを指摘されるとプレッシャーを感じる	.031	<b>.835</b>	-.064
2. 他者から、顔が丸いと言われるとプレッシャーを感じる	-.046	<b>.754</b>	.073
10. 他者から、自分の体型に関するネガティブなこと（太ったなど）を言われるとプレッシャーを感じる	.168	<b>.632</b>	.098
<b>III 他者からの食事の指摘から生じるプレッシャー</b>			
12. 他者から、間食の回数について指摘されるとプレッシャーを感じる	-.030	-.039	<b>.982</b>
13. 他者から、食事の質（カロリーが高い、食事内容など）について指摘されるとプレッシャーを感じる	-.006	.018	<b>.891</b>
9. 他者から、食事の量の多さについて指摘されるとプレッシャーを感じる	.147	.121	<b>.613</b>
因子間相関	I	II	III
I	—	.643	.681
II		—	.690
III			—
	累積寄与率(%)		
	72.911		

者から、足の太さを指摘されるとプレッシャーを感じる」など、他者から身体的なことに関する指摘を受けることで痩身プレッシャーを感じる内容の項目(4項目)で構成されることから、『他者からの身体の指摘から生じるプレッシャー』と解釈された。第3因子は、他者から食事内容、食事の質・量、間食、などを指摘されるとプレッシャーを感じる内容に関する項目(3項目)で構成されることから、『他者からの食事の指摘から生じるプレッシャー』と解釈された。

### 信頼性の検討

上記の下位尺度の Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、すべての下位尺度の  $\alpha$  係数は経験的基準である .70 を上回ることが確認された(他者との比較から生じるプレッシャー： $\alpha = .929$ ，他者からの身体の指摘から生じるプレッシャー： $\alpha = .879$ ，他者からの食事の指摘から生じるプレッシャー： $\alpha = .795$ )。各下位尺度における部分-全体相関を検討したところ、いずれの下位尺度においても、高い相関係数が確認された(他者との比較から生じるプレッシャー： $r = .829 \sim .910$ ，他者からの身体の指摘から生じるプレッシャー： $r = .844 \sim .866$ ，他者からの食事の指摘から生じるプレッシャー： $r = .887 \sim .937$ )。なお、尺度全体の部分-全体相関係数は  $r = .712 \sim .816$  ( $p < .01$ ) であった。

### 妥当性の検討

PTS の妥当性を検証するために、メディアから受ける痩身プレッシャー、食行動異常、体型不満との相関係数 (Pearson の積率相関係数) を算出した。結果は Table 2 に示してある。下位尺度「他者との比較から生じるプレッシャー」は、メディアから受ける痩身プレッシャー ( $r = .609, p < .01$ )、異常な食行動 ( $r = .413, p < .01$ )、体型不満 ( $r = .411, p < .01$ ) と正の相関を示した。下位尺度「他者からの身体の指摘から生じるプレッシャー」では、メディアから受ける痩身プレッシャー ( $r = .538, p < .01$ )、異常な食行動 ( $r = .373, p < .01$ )、体型不満 ( $r = .411, p < .01$ ) と正の相関を示した。下位尺度「他者からの食事の指摘から生じるプレッシャー」では、メディアから受ける痩身プレッシャー ( $r = .468, p < .01$ )、異常な食行動 ( $r = .463, p < .01$ )、体型不満 ( $r = .343, p < .01$ ) と正の相関を示した。PTS 全体では、メディアから受ける痩身プレッシャー ( $r = .625, p < .01$ )、異常な食行動 ( $r = .469, p < .01$ )、体型不満 ( $r = .439, p < .01$ ) と正の相関を示した。

Table 2  
PTS とその他の尺度との相関係数

	メディアから受ける 痩身プレッシャー	食行動異常	体型不満
PTS	.625 **	.469 **	.439 **
他者との比較	.609 **	.413 **	.411 **
他者からの身体指摘	.538 **	.373 **	.387 **
他者からの食事指摘	.468 **	.463 **	.343 **

\*\* :  $p < .01$

## 考 察

本研究は、20代から40代女性 ( $n = 1500$ ) を対象とし、他者から受ける痩身プレッシャーを測定する自己評定式尺度の成人版(痩身プレッシャー尺度; PTS)を開発し、信頼性と妥当性を検討した。その結果、3因子12項目が抽出された。内的整合性および部分-全体相関により、PTSの信頼性の高さが確認されるとともに、食行動異常やメディアから受ける痩身プレッシャーなどの外的基準との間に中程度の相関が示され、PTSの妥当性が確認された。

### PTS の因子構造

因子分析の結果、丸井・村山(2017)が開発した大学生版PTSは1因子13項目構造であったが、本研究では最終的に3因子12項目構造が示された。先行研究(原田, 2013)では、対人関係において、青年期と成人期で関わり方に変化が生じることを指摘しており、成人期になるにつれて人間関係の中で互いの欲求や意図などを汲み取る相互性が高まることを報告している。そのため成人は大学生と比較して、相手の意図などをより細分化して汲み取る能力が備わって来ることが示唆される。このような違いから大学生版PTSと成人版PTSの因子構造の差異が生じた可能性がある。

### 信頼性の検討

PTSの信頼性を検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、すべての下位尺度の $\alpha$ 係数は経験的基準である.70を上回ることが確認された。さらに各因子の部分-全体相関係数は.80であり各因子と尺度全体において、経験的基準である.70を大きく上回る値を示し、本尺度の内的整合性が十分であることが明らかになった。これを支持するように各下位尺度内における部分-全体相関は高い値を示した。これらの結果から、PTSには十分に高い一貫性があることが確認された。これらの結果に沿うように、先行研究(丸井・村山, 2017)でも、学生版PTSの $\alpha$ 係数は.957を報告しており、部分-全体相関においても高い値を示していた。以上のことから、PTSは信頼性が高く、安定性のある尺度であると考えられる。

## 妥当性の検討

過度なやせ状態は、食行動異常や、体型不満、瘦身願望などとの関連が多く報告されている（例えば、山宮・島井，2012）。さらに瘦身プレッシャーには他者から受ける瘦身プレッシャーのほかに、メディアから受ける瘦身プレッシャーがあることも示されていること（Schaefer et al., 2017）から、本研究では、食行動異常、体型不満、メディアから受ける瘦身プレッシャーに関する3つの尺度を用いて、PTSの妥当性を検証した。分析の結果、下位尺度「他者との比較から生じるプレッシャー」は、メディアから受ける瘦身プレッシャーと、食行動異常、体型不満との間で正の相関を示した。全ての下位尺度はメディアから受ける瘦身プレッシャーとの間に中程度の正の相関を示した。これに沿うように、先行研究（丸井・村山，2017）においてもPTSとメディアから受ける瘦身プレッシャーには中程度の相関が示されている。さらにPTSのすべての下位尺度は食行動異常と体型不満との間にも中程度の正の相関関係を示した。この結果を支持するように、先行研究（丸井・村山，2017）においても同様の結果が示されている。また、Schaefer et al. (2017)でも、メディアから受ける瘦身プレッシャーと異常な食行動、体型不満の間に中程度の相関が認められている。これらのことから、PTSには十分な妥当性があると考えられる。

## 臨床的示唆

近年、過剰なやせ状態のリスク要因として、瘦身プレッシャーが注目されており（Schaefer, et al., 2017）、そのほとんどの研究がメディアからの瘦身プレッシャーに対する指摘であった（浦上・小島・沢宮，2015）。最近になって他者から受ける瘦身プレッシャーの尺度が開発された（丸井・村山，2017）が、大学生のみを対象とした尺度であったため、大学生以外の女性を対象に測定する必要性があった。そこで本研究では、大学生以外の女性を対象に成人版PTSの開発を行った。本研究において、他者から受ける瘦身プレッシャーを測定するPTSは食行動異常、体型不満と関連することが示された。このことから、瘦身プレッシャーはメディアから受ける瘦身プレッシャーのみならず、周囲の他者の言動の影響を受けることが示唆される。これは、先行研究（Eisenberg, Berge & Sztainer, 2013）が指摘していた、親友などの重要な他者がダイエットを行うほど、不適切なダイエットを行うリスクが高まること、重要な他者からダイエット行動に対する励ましを受ける学生ほど、食行動異常が強くなることから支持される。他者から受ける瘦身プレッシャーは過剰なやせ状態を理解する上で重要な変数であり、PTSは幅広い年代での利用が期待されると考えられる。

## 研究の限界と今後の展望

本研究では、他者から受ける瘦身プレッシャーを評定するために成人版のPTSを開発し、高い信頼性と高い妥当性があることが認められた。しかしながら、本研究では、横断的研究であり、他者から受ける瘦身プレッシャーを強く感じる人が今後本当に予後が悪くなるかどうかの検討は出来ていない。したがって今後は、本研究で開発した尺度を用いて縦断的研究を行う必要があると考えられる。さらに本研究では、PTSの尺度開発のみにとどまっているため、カットオフ値の設定、再テスト法による信頼性のさらなる検討などが今後の課題であると考えられる。

本研究では大学生以降から40代までの女性を対象にした尺度の開発を行った。先行研究では、10代前半においても摂食障害の有病率が一定数認められることを指摘していること（Hudson, et al., 2007）から大学生以降の成人のみならず、中高生も対象にして実施を行う必要があると考えられる。また、本研究では、女性の摂食障害の有病率が男性と比較して多いこと（厚生労働省，2016）から、女性を対象とした尺度の開発を行った。しかし、一部には男性の摂食障害の罹患者がいることも報告されている（厚生労働省，2016）ため、今後は男性の対象者も踏まえた研究が必要である。

## 引用文献

- 馬場 安希・菅原 健介 (2000). 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 48, 267-274.
- Eisenberg, M.E., Berge, J.M. & Sztainer, D.N. (2013). Dieting and encouragement to diet by significant others: associations with disordered eating in young adults. *American Journal of Health Promotion*, 27, 370-377.
- Hudson, J.I., Hiripi, E., Pope Jr, H.G. & Kessler, R.C. (2007). The prevalence and correlates of Eating Disorders in the national comorbidity survey replication. *Biological Psychiatry*, 61, 348-358.
- 原田 新 (2013). 青年期から成人期における自己愛と対人関係との関連性の変化 発達心理学研究,
- 伊藤 大幸・村山 恭朗・片桐 正敏・中島 俊思・浜田 恵・田中 善大・辻井 正 (2016). 一般小中学生における食行動異常の実態とメンタルヘルスおよび社会的不適応との関連性 教育心理学研究, 64, 170-183.
- 厚生労働省 (2016). 平成 28 年国民健康・栄養調査報告 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyuu/h28-houkoku.html> (2018 年 7 月 10 日)
- Lähteenmaki, S., Saarni, S., Suokas, J., Saarni, S., Perälä, J., Lännqvist, J. & Suvisaari, J. (2014). Prevalence and correlates of eating disorders among young adults

- in Finland. *Nordic Journal of Psychiatry*, 68, 196-203.
- 丸井 明美・村山 恭朗 (2017). 大学生用瘦身プレッシャー尺度 (PTS for College Students) の開発と妥当性の検討 *人間文化*, 42, 55-61.
- 守安 可奈・諸井 克英・前原 澄・松谷 歩美・小切間 美保 (2011). 瘦身願望と社会的比較 (I) —瘦身理想像内在化の仲介効果— *同志社女子大学生生活科学*, 45, 29-36.
- Micali, N., Martini, M.G., Thomas, J.J., Eddy, K.T., Kothari, R., Russell, E., … Treasure C.J. (2017). Lifetime and 12-month prevalence of eating disorders amongst women in mid-life: a population-based study of diagnoses and risk factors. *BMC Medicine*, DOI: 10.1186/s12916-016-0766-4.
- 小澤 夏紀・富家 直明・宮野 秀市・小山 徹平・川上 裕佳里・坂野 雄二 (2005). 女性誌への暴露が食行動異常に及ぼす影響 *心身医学*, 45, 522-529.
- Schaefer, L.M., Harriger, J.A., Heinberg, L. J., Soderberg, T. & Thompson, J.K. (2017). Development and Validation of the sociocultural attitudes towards appearance questionnaire-4-revised (SATQ-4R) *International Journal of Eating Disorders*, 50, 104-117.
- 重田 公子・笹田 陽子・鈴木 和春・檜村 修生 (2007). 若年女性の瘦身志向が食行動と疲労に与える影響 *日本食生活学会誌*, 18, 164-170.
- 志村 翠・堀江 はるみ・熊野 宏昭・久保木 富房・末松 弘行・坂野 雄二 (1994). 日本語版 Eating Disorder Inventory-91 の因子構造について *行動療法研究*, 20, 8-15.
- 浦上 涼子・小島 弥生・沢宮 容子 (2015). メディア利用と瘦身願望の内在化との関係 *教育心理学研究*, 63, 309-322.
- 浦上 涼子・小島 弥生・沢宮 容子・坂野 雄二 (2009). 男子青年における瘦身願望についての研究 *教育心理学研究*, 57, 263-273.
- 山蔦 圭輔 (2012). 食行動異常の発現および維持にかかわる身体像不満足感の影響 *健康心理学研究*, 25, 42-51.
- 山蔦 圭輔・中井 義勝・野村 忍 (2009). 食行動異常傾向測定尺度の開発および信頼性・妥当性の検討 *心身医学*, 49, 315-323.
- 山宮 裕子・島井 哲志 (2012). 日本版 Sociocultural attitudes towards appearance questionnaire-3 短縮版 (SATAQ-3JS) の開発と信頼性・妥当性の検討 *心身医学*, 52, 54-63.

—2018.9.30 受稿, 2018.11.22 受理—